第十一回

ぶるやこしの詩

太田玉茗賞

うちわ祭り

米田　かずみ

幼い日
体の中に入った祭り太鼓や笛の音は
故郷を離れていても
聞こえてくることがある

眼に広がる祭り絵図
ページを繰れば
祇園の山車が街を練り歩く

町内名入りの提灯が揺れ
夜空に立ち上がる
等身大のからくり人形

観衆の渦の中
十二台の山車が居並び
笛太鼓の音は一斉に
天高く轟く

足元を流れる星川に
戦火を逃れきれなかった人々が眠る

川底の死者と生者が
笛太鼓に導かれ
それは祈りの笛の音色に変わって
天に昇る

祖父母から母へ
母から私へ
私から息子へ
受け継がれた笛太鼓の音は
この日、一つになる

うちわ祭り

今年も
祭りを知らせる熱い風が
私を呼んでいる

第十一回

雪とこどもの詩

宮澤章二賞

シンバルの音

大釜正明

子ども心にふるさとの空は
どこまでも澄んで　深かった
シンバルの音が空に反射して響くと
誰が亡くなったのかな　などと話し
葬列が行くのを見送った
彼岸花の道の途中で鳴り
辻の角や道端でも鳴らされた

どうして鳴らすの　と聞くと、
道々にいる悪霊を退散させるためだという
本当だったら怖いなどと言い合って
一年ほど経ったころ
当時の寮母先生が亡くなり
葬列に並ぶことになった

葬列には、やはりシンバルの音があった
ジャン、ジャン、ジャーン
ジャン、ジャン、ジャーン

シンバルが鳴らされる度に
ぼくは　目を凝らして辺りをみた
悪霊なんて　いない
むしろ目にとび込んで来るものがあった
白い機関場（水門）、夏の臨時のプール
ぐんぐん伸びるポプラの輝き
稲穂の彼方の　耕地開墾の石碑
遠く連なる北上山地などなど

ぼくらはシンバルの音の度に
ふるさとの風景をかみしめた

シンバルの音
いまでもかすかに聞こえてくる

第十一回

ぶるさとの詩

優秀賞

無音道

浅野政枝

節分過ぎた日曜夕方　和寒駅南側レンガの
農協前で三十歳の父は七歳の私に手綱を渡し
不安な目で「一人で帰れるか？」「うん」
買った少女ブックを家で早く読みたかった
　道産子クロが曳く　馬橇の手綱を両手に
元気よく「はいー！」スゥーイー動いた
父は博労をしている伯父さんの家で
お酒を御馳走になってくるんだと思った
　クロの足取り軽く　馬具が擦れて
調子良く　カッチャカッチャカッチャ……
町を出ると　木造柾屋根の家はまばら
クロは頭を揺すってブルルル…鼻息ならす
三十分ほど行くと『あっ　あの店の角を
曲がる時　クロが真っすぐ行ったら大変だ』
　店が見えた　手前で右手綱をグイと引いた
クロは鋭い目をし　頭をかしげ北へ向かった
『ホッこれで帰れる　クロよ　あと一息だ

白いリュックには　手足不自由な三つの妹の
粉ミルクと擦ってやるリンゴが入っている
妹はお腹空かせているんだよ　休まず行け』
開拓地の防風林に沈む夕日は赤さを増した
私の頬と口は固まり　手足の感覚がない
馬を追うチョッチ…チョッチの舌が動かない
　なのにクロは脚をそろえスーゥイ止まった
黒くて長い尾っぽをビューンと空中へ放ると
肛門から黄土色の丸い糞をボタボタボタタ…
白い道から湯気が立ち登った
私は口を閉じ　息をグフッ止めた
クロは尾っぽをヒョンと戻して黙々歩いた
　道程二里半の白い道に光って続く二本の線
群青の雪原の向こう疎らに無彩色の小さい家
蜜柑色の土管から細く白い煙が昇っている
　粉雪差し込む薄い玄関木戸をクロが鼻先で
ゴージゴージ擦ると母がセーターのまま飛び
出して「独りでよく…帰ったねぇ…」涙声だ
妹の眠る茶の間で　白樺がジュールジュール
パッツンピピンピッチン勢いよく燃えていた
　六十年以上過ぎても蘇る無音の中の音たち
ああ　人生で大切な懐かしき全ての音たちよ

京町家

戸田和樹

三十分は座っててもらわへんと、町家の風景
は分からしまへん。薄暗うて静かに感じはる
と思いますけど、そのうちに目も耳もなれて
きて、ちっとも気にならんようになるんどす

町家の風景の中に音があるという
光の有り様に合わせた音が存在するという

坪庭の前座敷に座っていると
通りの喧噪は遮断され
音らしい音は耳に入ってこない
ただ
季節の光が庭から入り込み
その眩しさからか
座敷の中がよほど暗く感じられるだけだ

そこに座ったはると、音も光も空から降ってくることがわかるんどすえ

たしかに
座り続ける時間の経過は
目をも耳をも坪庭に集中させ
わずかばかりの景色の変化を捉えさせようとする
光は垂直に降り
庭石や池の波紋に乱反射して
目の中に飛び込んでくる
その光の変化が
わずかばかりのかすかな音を作り
ちちっ　ちちちち
きー　くっくっくっ
と
ぼくの耳をくすぐるのだ

音のない世界の音とでもいうのだろうか
そのとき
カーン
静けさを破って鹿威しが音を立てる

時を刻む音

中村　実千代

扉一枚隔てた小さな店に
父は背中を見せて座っていた
作業机の上には
分解された腕時計のゼンマイが
「チッチッチ」と音立てながら回っていた
父の頭上に掛けられた時計が
「チクタク　ボーン」と鳴っている
鳩時計の小窓から小鳩が顔を出し
「ポッポッポー」と時を告げる

こんなに賑やかな店の中で
父は一人淋しく机に向かって
壊れた時計を直し続ける
一個直せば野菜が買える
二個直せば子供の菓子を買ってやれる
三個直せば末子に赤い服を着せてやれる
四個直せば……五個直せば……
父は眠らずに夜通し働いた

やがて　父は作業机に向かわずに
座敷に寝転がって
天井をじっと見つめるようになった
壁時計はうっすらと埃を被り
小鳩も顔を見せないままだ
何の音もしなくなった小さな店に
父のため息だけがやけに響いた

時を刻む音は無音となったが
非情にも時間は過ぎていき
父は自分の歳さえ覚えてはいなかった

父が八十五年の生涯を閉じた日
枕元に鳩時計を掛けた
ゼンマイを「ギーギー」と巻いたら
「ポッポー」と悲し気な声がした
それとともに小鳩が顔を出す
父の顔に微笑みが浮かんだ――
そう思えたら
涙がとめどなく流れ落ちた

夏の音

中本　百合枝

でたらめばかり云うんじゃない
祖父は後ろ姿のまま
幾分涼しい裏庭で
新しい薪を割っている
祖母はこの家にそぐわないお嬢様みたいに
きちんと畳んだ膝の上で
申し訳程度に縫い物をしている
夏はたゆたい
去るものかとでもいうように
たゆたい

祖父の裏庭は花盛り
隅っこの茶の木は
ぱっちりとミルク色の花をつけたし
竹垣では松虫草が
風に向ってうなずいている
ひよひよ伸びた鳳仙花も
秋風がひとはけ吹く頃には
黒い種をこぼすだろう

昨夜はお月さまとお空を散歩しました
学芸会の時みたいに
お星さま頭にかざって
おとついの晩は木蒐の
小さなベッドを借りました
木蒐の爺さん困りはて
ホウホウ一晩鳴きどおし
昼寝はかぼちゃの花の中
風が吹くとゆらあんと揺れます

みんなほんとのことだものと
わたしは云って
地べたに絵を描いている
薪割る音は小止みなく続くけど
わざと振り返らずにいる
振り返ったが最後
大事な夏が消えそうで
子供の小さな尻のまま
夢の続きを描いているのだ

ぽかぽかぽか

三宅鞠詠

はるが　きた
おひさまが
ぽかぽかぽか

ぽかぽかぽか　は
おひさまが
つぼみを
たたく　おと

おひさまに
おこされて
つぼみは
はな　ひらく

むかしの　ひとには
おひさまが

つぼみを
たたく　おとが
きこえたのだろうか
ぽかぽかぽか

第十一回

ぶるさとの詩

奨励賞

鉄橋

秋本　カズ子

揚げ雲雀の声をききながら
菜の花の咲く田んぼを越える
一里の道を　丸刈り頭とおかっぱ頭の列が
利根川の土手に向った
鉄橋の見える空は広い
私たちが赤ん坊の時　大洪水に襲われた村
六才の足が土手を翔ける
川の水はどこへ流れていくのだろう
うねる川の行方を見つめていると
鉄橋を渡る汽車の音が高らかに響いた

子どもは庭先や畔みちで遊んだ
往還を町に行くバスが通る
静まる夜には
遠足の続きのような汽車の音が聴こえてきた
父と母の諍った夜にはいつまでも闇の中の音
を想った

「村に居たら真っ黒になって働くだけだ」
兄は　十五で都会に出た
汽車の音を待ちわびる夜があり
兄の帰りに目を細める母がいた
私は・十五の卒業式のあと
友だちと連れ立って土手に上った
村を出る決心をしたから
セーラー服の笑顔を
ハルジオンの花の中に埋めた

春の陽は明るく
街角で風を受けていると
水際に芽生えた種子が
根を張り　水を潤している
遠くへ　遠くへと
種子を飛ばそうと心を馳せる
鉄橋を軋ませる音が
地球の片隅の息づく根を伝わってくる

竹の音

上野道雄

明け方近く　裏庭の方角から
パーン　パーン　と乾いた音が聞こえて来た
初めてその音を聞いた時は　猟師が鉄砲を撃
っているのかと思った
それにしては朝が早い
寒いのを我慢して寝床を飛び出す
横の布団では弟がまだ寝ている
隣の部屋の両親も起きる気配がない
急いで服に着替えて外へ出る
見渡す限り一面の銀世界が広がっていた
道路も田圃も畑も境目が消え
真っ白で真っ平らにどこまでも広がっている
遠く　上桂川の流れだけが細く黒く蛇行して
いる

色彩も物音も完全に消えた　静寂の白い世界
パーン　パーン

背戸の方角から　また聞こえて来る
膝まである新雪を長靴で踏んで裏庭へ回る
パーン
ひときわ高い音が耳を撃つ
あっ　竹藪の竹が折れ曲がり地面に頭を付けている
一本二本…五本六本…一〇本…
数え切れないほど何本もの竹が
雪の重みで折れ曲がり細く割れている
太い孟宗竹が折れているのだ
繁った葉に積もる雪は　そんなに重いのか
折れずに耐えている竹は　強いのか

あの頃は雪がよく降った
一冬に何度積もったのか
根雪となった雪の上にまた新しい雪が積もる
一メートル近くも積もれば
車はおろか道を歩く人も少なくなる
村は　音の無い沈黙の世界となる
そんな冬の日　新しく積もる雪が竹を折って
パーン　パーン
と乾いた音を聴かせてくれる

『手紙』

各務　奈津美

日曜日に映画を見に行きました
好きな人が学校を休みました
お気に入りの傘が壊れました

遠くに住んでいる顔も知らないあの子に
いつも手紙を書いていた
もう届いたかな
返事はまだかな
何万通の中にある　たった一通の手紙

毎日夕方五時あたり
郵便屋さんのバイクの音が
遠くからやってくる
今日は止まるかな
今日も過ぎるかな
昨日は過ぎちゃったな
そっと玄関に近づき　耳をすます

止まった
カタン　何かがポストに落ちた
あの重さがある音は　たぶん封筒
郵便屋さんの気配が消えてから
少し錆びた赤いポストを開ける
家族の名前が並んだポスト
私の名前は一番後ろ
錆びたポストは
開けるときも　閉めるときも
ギッて鳴く
あった　あの子からの手紙
スズランの絵の封筒

ケータイなんてなかったあの頃
ポストは宝箱だった

製袋機の音

七田高志

カシャーンカシャーンと鳴り響く
朝から晩まで鳴り響く
我が家の仕事は封筒作り
四メートルの鉄の枠に無数のローラー
それが封筒を作る製袋機
父親が紙の束を持ち機械に投入
吸い込まれた紙は機械の中で
折りたたまれ糊をつけられ
ローラーの中を流されていく
出てきた時には封筒になっている
それを母親が百枚ずつ帯封する
シャッシャッシャッと紙の音
毎日繰り返される封筒作り
一枚で何銭の世界
父親も母親も鳴り響く機械の音の中
もくもくと作業を続ける
指の感覚だけで百枚を数える

機械の音から不具合を見つける
毎日毎日繰り返される封筒作り
生活の為、子どもの為
カシャーンカシャーンの音の中
ただひたすらに音を聞く
ただひたすらに紙を見る
我が家の仕事は封筒作り

声

高村晴美

「遠くに行ったら、ダメだよ」と
母の大きな声は
わたしの耳を素通り
野良仕事の手を休めず
声だけが
野原いっぱいに
広がった

背丈ほどの草むらの中
花を折り　虫に触れ
夕暮れまで　太陽と遊んだ

空は　手を伸ばしても届かず
風は　慈悲のようにわたしを包む
母は　真黒な顔で
桃色のセーターが
何処かに行ってしまわないようにと
祈っていたのだろう　多分

母が呼んでいる
「なあに」
「あんた、今日、学校は」
「ズル休み」
嬉しそうに　笑った

「遠くに行くな」と言った人が
わたしから　どんどん
はなれてゆく

あの野原に
母子草は　まだ咲いているだろうか
もう一度と　願うことは
我が儘なことだろうか

戻れない
だからこそ
声が
聞こえる

はずむボール

武西良和

人の往来が途絶えた夜更け
家と家の間の狭い通りに沿って細長く
ときどき走るように
アスファルトの道に聞こえ
書斎の壁に響き
窓からも入って来ようとする

音が止むと交代して
ぼくが弾ませる

晴れ渡った夜にはボールが
大きく弾み
薄れかかった記憶の断片を
つなごうとする

厚い雲が垂れ込め湿気のある夜など
闇の重さがボールを弾ませようとしない

手から何度も滑り落ちて
その度に近寄ってきていた記憶は遠のき
弾む音が転がっていく

音にときどき
小さな笑い声が紛れ込む

家の裏手を通り過ぎて音は
暗い外灯に照らされた
路地を遠ざかる
徐々に音は小さくなり
黒ずんだ遥かな山へと駆け上がる

生活のにおいが消えた村に入ると音は
崩れかけた家の
外れた雨戸の戸板や
障子の破れを震わせる風の
メロディに加わることだろう

昨夜は雨で音が聞かれなかった
雨だれはボールの弾む音を知らない

残像

田村全子

大きくなったら
どこか遠くへ行こう
叱られて外に立つ夜
星を見上げてそう思った
子供のころは転々として
思い出せる家がない
安住できる場所が欲しかった
はやく大人になりたかった

おかあちゃんは
よそのおかあさんになったので
新しいおかあさんは
おかあちゃんの姉さんがなった
おとうさん付きだった
七ツ違いの妹もできて
ランドセルに重心をとられながら
小学校までバスで通った
町の端から端まで毎日遠足だ

友だちは羨ましがったけれど
本当のおかあさんとおうちが
あるほうがよっぽどいいよ

大きくなって
従妹は遠方へ嫁に行き
叔父叔母もみおくって
小さいわたしを知る人はいなくなった
それは着ているものを
剥がされていく寒さに似ている
遅い帰りを停留所で待っていた叔母
病院までおんぶしてくれた叔父
星空の下で泣いた日が懐かしい
慈しまれていたことは
愛を返せなくなってからわかる

今もときどき見かけることがある
町中に猫背の母を
交差点でブレーキをかける自転車の父を
こみあげてくる涙は感謝

機織りの音がやんでも

三ツ谷　直　子

玄関で友達を呼んでも
誰も出てこない時は
家の裏の工場に行く
工場の機織りの音の中に
いつも友達はいた

友達と家の中で
話をしている時も
その音は続いていた
別珍コール天の産地として
その音は風に乗り海を越え空を渡った

いつからだろう
工場が不景気になって
帰省する度
勤めに出る人が増えてきたと聞いた

私の耳もだんだんと
聞こえにくくなって
補聴器つけて
手話通訳に頼る日々

でも、子どもの頃の
機織りの音は
記憶の扉をそっと開ければ
今でも
あの時の音のままだ

機織りの音がやんだ町は
帰省する度に更地が増えた
その土の上に
家と工場があった
そして友達が住んでいた
きらめく光のように
はしゃぎ
笑いころげていた日々が
確かにそこにあった

〈よせてはかへす〉

もときかける

みんなで眠った祖母の家は　阿武隈の流れに
沿う　辺りでいちばん小さな村の　その真ん
中をつっきる道の　ちいさな和菓子屋だった
夏になると子供たちが集まって　遊んで　食
べて　そして眠った　増築によって建てられ
た二階の寝床は　大きなトラックが通るたび
に　ガクンと一度沈みこむようにして　あと
は小刻みに小さく揺れた　みんなの寝息が聞
こえる中を　車体は遠くから　その一本道を
煌々とライトを灯して　廊下に面した窓ガラ
スから　光はさらに障子を伝って　柱や襖を
順繰りに照らし出す　そして家は鳴り　小刻
みに揺れ　束の間　再び静寂の中に　すっー
と寝息がある　次にまた　トラックが通り過
ぎるのを　一人迎えるのが不安で　隣に眠る
祖母の手を握る　眠れないと漏らすと　しわ
くちゃの手が　やわらかく握り返した

遠くから煌々とやってくる　不思議と不
安は消えている　むしろその燈に引き寄
せられているようだ　一度沈みこんだ後
再び浮き上がって　そのリズムに合わせ
ながら　航海を続ける　すっーと　イル
カたちの歌声に耳を澄まして

夢から覚めて　長い月日が流れると　子供た
ちはそれぞれの道を歩き出した　みんなで集
まることもなくなった　ある夏の暮れ　火事
が起きて　跡には餡をこねる機械が　ぐにゃ
りと一つ残った　祖母は道の向かいに新たに
家を建てた　菓子はもうやめた　奥の畑のと
ころに建てれば静かだと勧められたが　なん
だかさみしくなると言って　きかなかった

ふと思い出す　静寂の中の寝息と　それを打
ち破る殺那の　振動を　その往還はいつしか
夢の中にしみ出して　祖母はみなの手を握り
一棟の舟は波間をゆくのである

語り部の街

柳坪幸佳

（その時の音はけして再現できません）
暗やみの中で、とまどいながらうつむいている
語りはゆらゆらと壁を伝わり
わたしはそれに、身を任せることすらむずかしい

（その時の人びとの声は、けして表すことはできません）
守られた語らい合いの中にいて
身をすぼめる
レモン水がじっとりと汗をかく

川の中で死んだ指が力ニに食われる
八月なのに

人びとはさむい、さむいと火を求める
さっきまで熱いと泣いたその火の底に
顔を持ったまま
彼らは瓦礫のようにくべられていく

（その時のうただけはうたいましょう
黒い雨を浴びて子どもにもどった、その男の
うた）

わたしはゆっくりと立ち上がる
窓からは、守られた街が静かにつぶやく
梢に、水面に、石のかけらに
光となって、腰を下ろした
人びとにつながる、たくさんの声

（裂かれた喉がつながるのならば
この声をどうぞ見つけてください）

第十一回

詩

市民奨励賞

「音のない世界」

岩　嵜　久美子

しんしんと　しんしんと
雪は音もなく降り積もってゆく
しんしんと　しんしんと
山も村も畑も　白銀にそまり
光り　かがやく
父は越後の国で生まれ育った
明治43年4月

終戦の年　私が3歳の時
浦和の呉服屋の一番番頭だった
父は胃の病で音のない世界へ
旅立った　3ケ月後に父の待ち
望んでいたおとうとが生まれた
春　桜が咲く頃になると
母は姉と私と幼いおとうとを
夜　桜祭りに連れて行ってくれた
夜店のあかりは赤い電球の下で

風船や綿アメ等が売られていて
とてもにぎやかであった
突然　幼いおとうとは
「とうちゃんをかってくれ！」…
と小さな声でさけんだ
周りの人達は皆家族連れで歩いて
いるのに自分には「とうちゃん」という
大きなたよりになる人が居ないことに
気づいたのだ　現実を知ったのだ

毎年　毎年　桜の花の咲く頃になると
幼かったおとうとの買う事の出来ない
「とうちゃん」の言葉を思い出す
しんしんとしんしんと越後の雪は
降るけれどもう「とうさん」は帰って来ない
父のふるさとは私達のふるさと
風になり光りになって音のない世界へ
行ってしまった「とうさん」そして「かあさん」…
私達をいつも見守ってくれて
いるのだと知った

おかいこさん

小林　百合子

さむいと死んじゃうから
もうタンゴの節句もすぎたのに
火鉢の炭がぴちぷちなる
エビラに乗ってきたおかいこさん

おいしい桑の葉をどうぞ
わたしも摘んだんだよ
おこさま
ちいさなおかいこさんのこと
食べる食べる
ねむるねむる
頭をもたげてねむる
またおきだして桑の葉食べる
ねないで食べる

さわさわさわさわ
さわさわさわさわ

川がながれてるみたい
家のなかなのに
耳もとでずっとながれてる
おこさまが葉を食べてる
いっしょけんめい食べている
さわさわさわさわ

おあがりの日
おっきくなったおこさまが
繭箱にはいる日
じぶんだけのお部屋でまっ白い繭になるよ

布の袋につめられて
じいちゃのリヤカーでクミアイに運ばれてく
きれいなタンモノになれるといいね
お正月には帰ってくるかな
わたしのもあるかな
あたらしい晴れ着になれるかな

父の口笛

蓮見直子

父の口笛が好きだった
母のピアノよりも
二人の姉の歌声よりも

父の口笛が好きだった
父は必ず上機嫌だったから
幼い私は何度も何度もせがんだ

父の口笛が好きだった
山登りに疲れても
父の口笛について行った
やり残した夏休みの工作も
口笛の魔法でやり終えた
初めての乗馬も
父に抱かれ背中で口笛を聞いた

父の口笛が好きだったのに

何度練習しても音すら出せなかった
　女の子は吹けなくていいのよ
と母は笑った

父の口笛が好きだったのに
いつからせがまなくなったのだろう？
最後に聞いたのはいつだったのだろう？

父の口笛好きだったのに
父は亡くなり二度と聞くことはできない
でもふとした瞬間
あの音色が心の中で聞こえてくる
遠い日の思い出の音色